

フューチャー・アース構想の推進事業
「日本が取り組むべき国際的優先テーマの抽出
及び研究開発のデザインに関する調査研究」
平成 26 年度調査研究報告書

代表者 谷口 真人

所属・役職 総合地球環境学研究所

研究推進戦略センター Future Earth 推進室 教授

(英語表記) Head of Future Earth Unit, Center for Research Development

Research Institute for Humanity and Nature

氏 名 谷口 真人

(英語表記) TANIGUCHI Makoto

目次

1	研究開発プロジェクトの達成目標.....	2
2	当該年度の調査研究報告.....	2
2-1	全体計画（実施内容、マイルストーン）	2
2-2	全体計画（スケジュール）	6
2-3	当該年度（平成 26 年度）における調査研究報告	6
3	研究開発プロジェクトの実施体制.....	9
3-1	実施体制図	9
3-2	プロジェクトの構成	9
4	当該年度における調査研究成果の一覧.....	10
4-1	調査研究の実績一覧	10
4-2	成果発信・広報活動等一覧	10

1 研究開発プロジェクトの達成目標

本研究開発プロジェクトにより、期間内に達成しようとする成果は、以下の3つである。

- 1) 日本が取り組むべきテーマのテーマ群リスト
- 2) トランスディシプリナリー (TD) 研究として取り組むべきテーマ群のリスト
- 3) a) 日本の強みの評価軸、b) TD 研究の適応性を判断する評価軸

なお、1) 2)のテーマ群の提示は、それぞれの課題テーマに付随する研究課題 (research questions) と、その課題テーマに関して研究実績がある研究機関および関連ステークホルダーを特定し、関係資料とともにパッケージとして提示する。上記1) 2)の成果を達成することで、日本が国際共同研究においてCRA (Collaborative Research Action)を提案する際に、日本がイニシアティブをとるための根拠となる資料とするとともに、実際の提案の際に組むべき連携先を判断する材料とする。また3)の評価軸の設定は、持続可能な社会のための地球環境研究及びTD研究を開発する上で、研究評価システムとして活用する。

なお本研究開発プロジェクトの成果には、上記を含めて、テーマ群リストおよび2つの評価軸を決定するに至る過程と、絞り込む前の優先テーマ候補群および、評価の軸を決定するに至る観点などを、エビデンスベースで調査研究報告書の形で提出する。

2 当該年度の調査研究報告

2-1 全体計画 (実施内容、マイルストーン)

本研究開発プロジェクトでは、日本、及びアジアのテーマ群を抽出し、日本の強みとTD研究の適応性を判断する評価軸を用いて、日本が世界においてイニシアティブを発揮できるテーマ群と、トランスディシプリナリー研究として取り組むべきテーマ群の抽出を行う (図1)。そのために、まず日本を対象に課題抽出法を検討・開発しつつ、日本の課題の収集、テーマ群の抽出を行い、次にアジアのテーマ群の抽出をする (実施項目A、B)。また、日本の強みとTD研究を評価する評価軸を開発し、テーマ群の中から、日本が取り組むべきテーマ群と、TD研究として取り組むべきテーマ群のリストを抽出する (実施項目C、D)。課題の収集や抽出、及び評価軸の設定に関しては、自然・人文・社会科学の研究者に加え、社会各層のステークホルダーと協働して行うため、関連するステークホルダーのネットワークの構築を研究課程を通じて行う (実施項目E)。

実施項目A: テーマ群の抽出 (日本)

1. テーマ群の抽出に関する方針・手法の検討

課題の抽出方法に関しては、文献レビューと有識者・経験者への相談 (メール、ビデオ会議、出張) により検討する。フューチャー・アース暫定事務局では、テーマ群の抽出にあたり、H26年5月に京都でワークショップを行い、H26年秋頃報告書を出版する予定となっているが、その経験も踏まえつつ、本研究プロジェクトでは、日本およびアジアのテーマ群の抽出を通して、今

後も有用な課題抽出の方法論を開発する。また、実施項目 C の文献調査の結果を踏まえ、過去の課題抽出に関する事例を調査することで、過去の関連研究と重複することがないように留意する。

2. 課題の収集

次に、テーマ群を抽出するための課題の候補を、アンケート調査とグループ・インタビューを通じて収集する。アンケート調査に関しては、株式会社マクロミルなど、リサーチ業務を専門とする会社に委託し、様々なステークホルダーを含む 1,000 名以上を対象に、幅広く収集する。ただし、アンケート調査は、多くの人々から意見を収集するのに有効である一方、特に研究者や環境問題に関する職業についていないステークホルダーにとって、課題を的確に指摘しづらいという問題がある。そのため、より掘り下げた課題を収集することを目的に、グループ・インタビューを行うこととする。インタビューは、研究者、行政、企業、市民の 4 つのステークホルダーの層ごとに最大 12 名のグループとし、メンバーの選定をリサーチ会社に委託することで、客観性を保持するように努める。

3. 課題候補の優先づけとテーマ群の抽出

収集した課題をテーマ群に分けるため、研究者とステークホルダーによるワークショップを行う。(場所は京都市内のホテル、時期は平成 27 年度前半を想定。) ワークショップでは、課題の重要性を示す評価方法についての議論をするとともに、最終日までには日本のテーマ群の抽出を行う。日本のテーマ群、及びテーマ群の抽出手法に関しては、報告書を作成するとともに、ワークショップ参加者と共同で原著論文を執筆し、H27 年度中に投稿することを目指すこととする。

実施項目 B : テーマ群の抽出 (アジア)

1. 課題の収集

H27 年度からは、実施項目 A で開発した方法を用いて、テーマ群の抽出をアジア地域に展開する。アジアは地域的に広いことから、実施項目 E におけるネットワーク形成を並行して行い、グループ・インタビューやアンケート調査は、アジア各国において活動する共同研究員が中心となって実行し、幅広く課題収集を行う。課題の収集は H28 年度前半までに終了する。

2. 課題候補の優先づけとテーマ群の抽出

収集した課題をテーマ群に分けるため、専門家とステークホルダーによるワークショップを行う。(場所は京都市内のホテル、時期は H28 年夏頃を想定。) ワークショップでは、課題の重要性を示す評価方法についての議論をするとともに、最終日までにはアジアのテーマ群の抽出を行い、課題ごとの研究機関間国際ネットワークを構築し、将来の国際共同研究の準備態勢を整える。アジアのテーマ群に関しては、本プロジェクトの最終報告書で報告するとともに、H28 年度後半に原著論文を、ワークショップ参加者と共同で執筆し、投稿する。

実施項目 C : 評価軸の設定 (日本の強み)

評価軸の設定に関しては、日本が強い研究分野を俯瞰するため、以下の方法で調査と分析を行う。

1. 第一段階として、日本に於ける地球環境学研究 (GEC, Sustainability Science 等) の現状と動向についての文献レビュー (一部分は計量書誌学手法で行う) を調査会社に委託し、日本の広い意味での「強み」を探求し、この実施項目の基礎を築く。
2. 計量書誌学的な分析を行う。Thomson Reuters の Web of Knowledge (InCite)、Scopus、Google Scholar 等を利用し、例えば、日本の特定な分野やジャーナルでの貢献、日本人オーサーの論文の国際的共著の割合、共著のネットワーク分析から見る日本の国際的な研究協力等を解析する。この研究のために、実施者か協力者として、計量書誌学の専門家を評価軸設定グループに

加えることを計画している。

3. 既存の研究・プロジェクトのデータベース（JST、国立情報学研究所の科学研究費助成事業データベース、等）を検索、分析し、日本人研究者、または、日本出資の研究を調査する。
4. 特にアジアで環境関連事業を行う産業や ODA 実施機関へのヒアリングを実施し、(平成 27 年度 10 月頃) その後、有識者を集めたワークショップを行い、評価軸を設定する（平成 27 年 10 月以降）。

最終的に、テーマ群ごとに、ネットワーク図のような形で定量的且つ定性的に解析を行う。最終年度には、アジアの課題テーマ（実施項目 B）のリストの中から、日本が強い課題を抽出する。

実施項目 D：評価軸の設定（トランスディシプリナリー研究の必要性）

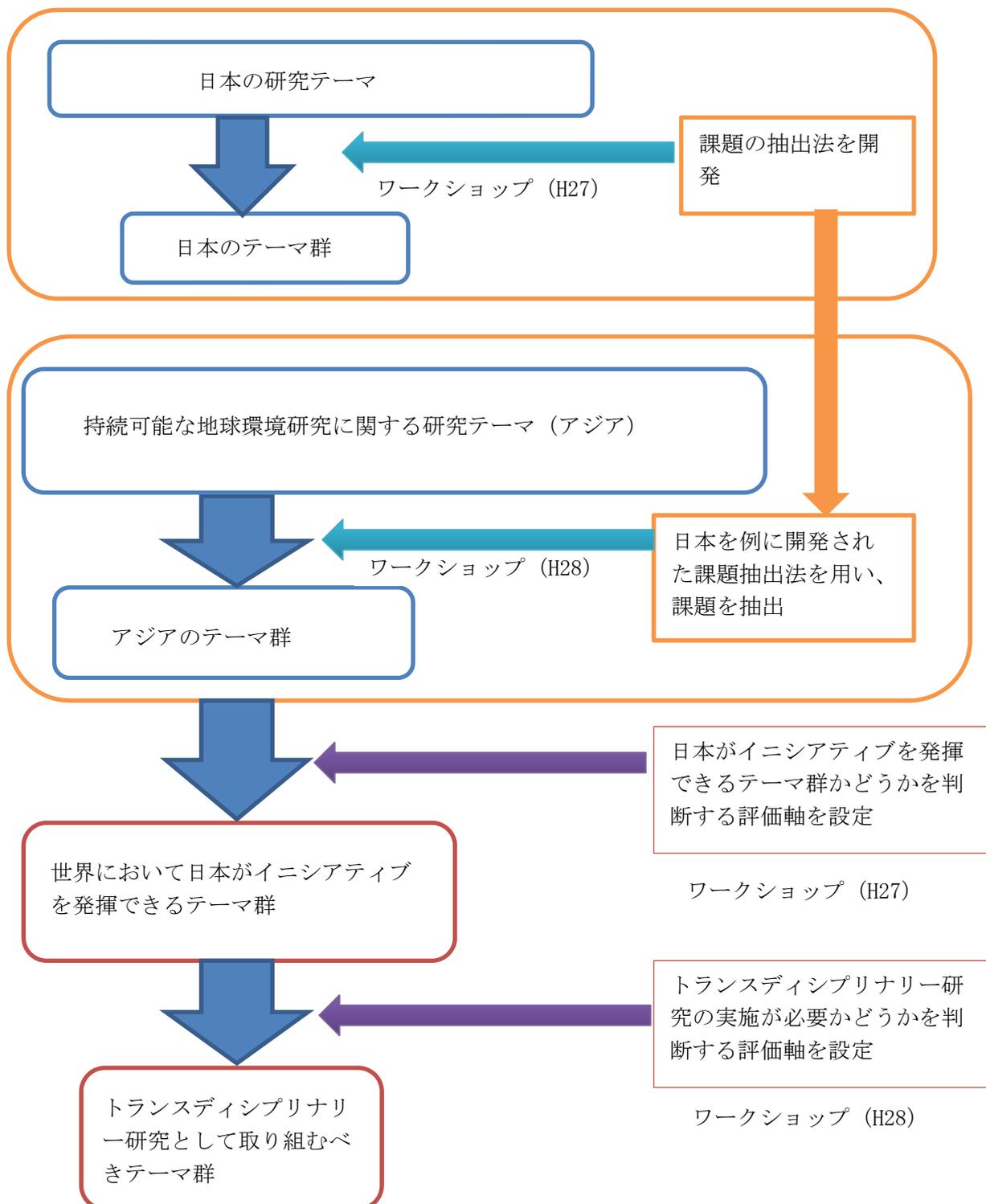
トランスディシプリナリー研究には、まず学際的アプローチが不可欠である。この実施項目 D で、総合地球環境学研究所（以下、地球研）での学際的研究プロジェクトの豊富な経験（学際的研究チームワーク、統合的な research questions、包括的報告等）を生かす。

トランスディシプリナリー研究の必要性に関しては、まず既存の論文をレビューし、その定義を明らかにするとともに、事例集を作成し、研究の全体像を俯瞰する。初歩的な文献レビューから見出せる仮説として、次のような評価軸が考えられる：1) 課題に対する知識、2) 不確実性、3) 利害関係の程度。文献レビュー後、特にトランスディシプリナリー研究を行っている研究者とステークホルダーに対し、インタビューを行い、ワークショップを通じて評価軸を設定するとともに、テーマごとのデータを提出する。最終年度には、日本が強いテーマ群(実施項目 C) のリストの中から、トランスディシプリナリー研究として取り組むべき課題を抽出する。

実施項目 E：ネットワーク形成

実施項目 A～D における、インタビューやワークショップを開催するにあたり、自然・社会・人文科学の研究者間のネットワークに加え、社会各層のステークホルダーとのネットワーク形成が重要である。更に、H27 年度以降は、プロジェクトをアジア地域に展開するため、日本以外の国の研究者やステークホルダーとのネットワーク形成も必要である。プロジェクトの実施機関である地球研は、フューチャー・アースのアジア地域事務局となっていることから、ネットワーク形成においては、アジア事務局の活動を基盤にして行う。具体的には、アジア諸国におけるフューチャー・アースの国内委員会やフューチャー・アースと親和性の高い学術団体（ICSU-ROAP 等）と連携するとともに、アジア諸国の研究者をフューチャー・アース推進室の共同研究員として受け入れることで、当該国におけるインタビューや、ワークショップの開催支援を依頼する。更に、ネットワークのメンバーと共に、プロジェクトの計画、実施状況の報告、及びレビューを行うため、毎年度国際ワークショップ（Future Earth in Asia）を京都で開催する。

図1：実施手順



2-2 全体計画（スケジュール）

項目	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
A: テーマ群抽出 (日本)	←→	←→	
JSRA ワークショップ		↔	
B: テーマ群抽出 (アジア)		←→	←→
アジア SRA ワークショップ			↔
C: 評価軸の設定 (日本の強み)	←→ サーベイ	←→	←→
D: 評価軸の設定 (TD 研究)	←→ 設計	←→	←→
E: ネットワーク形成	←→	←→	←→
ネットワークワークショップ	↔	(事例集ワークショップ) ↔	↔
総括			←→

2-3 当該年度（平成 26 年度）における調査研究報告

(1) 概要

テーマ群の抽出（日本）では、テーマ群の抽出に関する方針・手法の検討として、文献レビューと有識者・経験者への相談を行い、課題抽出法に詳しい論文や報告書を収集した。課題の収集については、一般市民を対象としたグループ・インタビューを実施し、フューチャー・アースの戦略的優先課題 2014 で提示された 8 つの挑戦ごとの質問に対する研究テーマと発言録のリストを作成した。また、評価軸の設定（日本の強み）では、日本に於ける地球環境学研究の現状と動向についての文献レビュー・データ検索の準備を行うとともに、データ分析能力を有する研究支援員の雇用に向けた準備を行った。評価軸の設定（トランスディシプリナリー研究の必要性）においては、JST-FE 委員会会議で超学際的研究の必要性と評価軸の重要性の 2 点が必要だということが明らかになったことを受け、超学際的研究の必要条件についてヨーロッパを中心に概要把握から調査を開始した。ネットワーク形成に関しては、地球研が Future Earth アジア地域事務局として正式に決定されたことを受け、アジア地域における Future Earth 研究の推進体制を、第 3 回 Future Earth in Asia workshop において検討を行った。またアジアの若手研究者・実務者による Future Earth in Asia Youth Workshop や RACC、京都国際環境シンポジウム、サイエンスアゴラ 2014 Future Earth ワークショップ「対話で考える日本の戦略」等を通して、国内外の Future Earth ネットワークの形成を行った。

(2) 具体的内容

実施項目 A：テーマ群の抽出（日本）

1. テーマ群の抽出に関する方針・手法の検討

課題の抽出方法に関しては、文献レビューと有識者・経験者への相談（メール、ビデオ会議、出張）を行った。文献レビューでは、主に Web of Science, Google Scholar, Google などの検索エンジンを使い、priority setting, priority research agenda などのキーワードで課題抽出法に詳しい論文や報告書を収集した。

2. 課題の収集

テーマ群を抽出するための課題の候補を収集するために、株式会社マクロミルに委託し、一般市民を対象としたグループ・インタビューを実施した。インタビューの対象者を選ぶに当たり、50000 名を対象としたスクリーニング調査を行った。調査の結果、環境問題に関する関心が深く、自由回答欄への回答が長い人を、関東・関西別、男女別に、それぞれ 5 名選出した。3 月 1 日に大阪、8 日に東京で 1 グループ 2 時間のインタビューを行った。フューチャー・アースの戦略的優先課題 2014 で提示された 8 つの挑戦ごとに、「どのような研究をしてほしいのか」という質問を投げかけ、回答してもらった。回答をもとに、ファシリテーターにより研究テーマと発言録のリストが作成された。研究テーマはそのままではワークショップで利用するには粗すぎるため、発言録を元にしたテーマの修正を試行中である。

実施項目 C：評価軸の設定（日本の強み）

H26 年度の研究計画で、日本の「強み」を探求するために、日本に於ける地球環境学研究の現状と動向についての文献レビューの調査準備を行った。文献レビュー・データ検索を調査会社に委託する方向で準備を行ったが、調査が可能な会社を見つけることはできなかった。また、地球研以外の研究機関での協力研究者を中心にして調査を行うことも検討したが、やはり適当な協力者を見つけることができなかった。H27 年 4 月より、データ分析能力を有する研究支援員を雇用するために公募を行った。

実施項目 D：評価軸の設定（トランスディシプリナリー研究の必要性）

実施項目 D において、超学際的研究の必要性とその研究をいかに評価するかという二つの主たる内容が必要だということが、1 月 16 日の JST-FE 委員会会議の議論で明らかになった。前者の超学際的な研究アプローチはどういう条件のもとで利用する必要があるかということ明らかにすることから調査を始めた。H26 年度、まずは文献を収集し、ヨーロッパを中心に、TD 研究の必要性と評価に関する学問の概況を把握した。

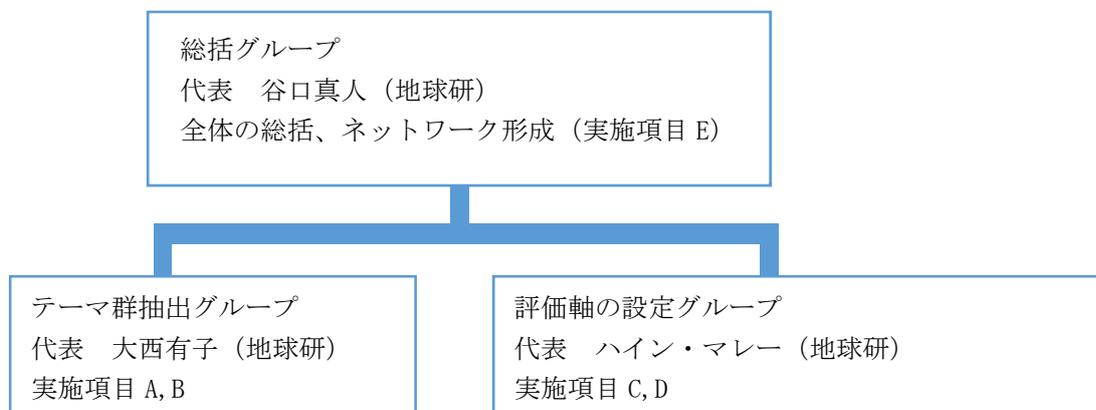
実施項目 E：ネットワーク形成

地球研が Future Earth アジア地域事務局として正式に決定されたことを受け、アジア地域における Future Earth 研究の推進体制 (Regional Sub-nodes, Thematic Centers, Regional Committee の設立に関する検討) を協議する為に、10 月 1 日に台北にてアジア諸国の関係者会議を開催した。そこでアジアでの FE 地域委員会の設立を内定し、委員会事務局はアジア地域ハブの地球研が兼ねることで合意した。また 2015 年 1 月 21 日には地球研にて第 3 回 Future Earth in Asia workshop (海外から 35 名、国内から 18 名が参加) を開催し、あわせて 1 月 22 日には Future Earth アジア地域委員会 (仮称) に関する会議 (非公開) において、アジアでの優先研究課題や共同研究体制等について検討を行った。Future Earth アジア地域委員会の議論では、2015 年 11 月のアジア地域委員会発足に向けて委員の公募等の準備を行う事、地域委員会は当面アドバイザー的な役割としてスタートし、将来的には決議機関の役割を果たすこと等が確認された。また同時期に、アジアの若手研究者・実務者による Future Earth in Asia Youth Workshop を開催し、Future Earth のアジアにおけるネットワークの形成を行った。

その他、RACC（気候変動に関するリージョナルアクションフォーラム／極端気象、2014年10月5日）、京都国際環境シンポジウム～パートナーシップによる東アジアの持続可能な低炭素都市づくり～（2014年11月5日）、サイエンスアゴラ 2014 Future Earth ワークショップ「対話で考える日本の戦略」（RISTEX と地球研の共催、2014年11月8日）、Scoping for SIMSEA（2014年11月19-20日、マニラ）会議、SIMSEA Steering Committee 会議（2015年2月10-11日、クアラルンプール）等において、ネットワークの形成を行った。

3 研究開発プロジェクトの実施体制

3-1 実施体制図



3-2 プロジェクトの構成

○総括グループ (グループリーダー 谷口 真人)

(1) 実施項目：

- ・ 実施項目 E ネットワークの形成

(2) 概要：

- 1) 第3回 Future Earth in Asia ワークショップ (2015年1月21-22日)
 - ・アジアでの Future Earth ネットワークの形成を目的としたワークショップを開催し、国内外の研究者とステークホルダー (産業界、NGO 等) を招聘し、アジアでの Future Earth のネットワーク構築・強化、及びアジアで重点的に取り組むべき課題等について討論する。
- 2) アジアでの Future Earth ネットワーク構築フィリピンで開催された ICSU 主催の、Scoping for SIMSEA 2015-2020 に参加。
 - ・Future Earth についての情報収集及び共有のため、第3回 Future Earth 国際科学委員会 / 関与委員会合同委員会に参加。
 - ・ICSU、アジア・パシフィック事務局長の Nordin Hasan 氏をマレーシアより招聘し、アジア地域での Future Earth の動向の進捗についての情報共有及び、アジアネットワーク構築事業に関する知識と意見交換を行う。
 - ・ベルモントフォーラム (SMARTS2) との共催ワークショップを開催し、Future Earth の動向に関する情報を提供する。
- 3) 国内外への情報発信、アンケート実施、コミュニケーション
 - ・地球研のウェブサイト及びその他のネットワーク手段を用いて、日本語及び英語での情報発信及び、WEB アンケートを実施する。
 - ・テレビ会議を約2週間に1度のペースで RISTEX 及びその他 Future Earth の関係者を行い、情報発信及び共有を行う。

○テーマ群抽出グループ（グループリーダー 大西 有子）

（1）実施項目：

- ・ 実施項目 A テーマ群の抽出（日本、テーマ群の抽出に関する方針・手法の検討）
- ・ 実施項目 A テーマ群の抽出（日本、課題の収集）

（2）概要：

- 1) テーマ群抽出に関する方針・手法の調査
- 2) 事前アンケート調査
- 3) グループ・インタビュー
- 4) 優先課題及びテーマ群抽出のための分析

全国規模の事前アンケート調査及びグループ・インタビューにおける対象者の選定及び情報収集などは外部委託とし、テーマ群抽出に関する方針・手法の調査、優先課題とテーマ群抽出のための分析については地球研にて実施する。

○評価軸設定グループ（グループリーダー ハイソ マレー）

（1）実施項目：

- ・ 実施項目 C 評価軸の設定（日本の強み）
- ・ 実施項目 D 評価軸の設定（トランスディシプリナリー研究の必要性）

（2）概要：

- 1) 日本の強みに関する文献レビュー
- 2) 共同研究者との計量書誌学的研究を実施
- 3) 事例収集
- 4) 評価軸設定のためのデータ分析

日本の強みに関する文献レビューについて、計量書誌学的研究の専門家である共同研究員の協力を得ることにより、幅広く、長期的な研究を行う。事例収集及び評価軸設定のためのデータ分析は、データ分析を専門とする研究推進支援員を中心として計画的に取り進めていく。

4. 当該年度における調査研究成果の一覧

4-1. 調査研究の実績一覧

- 1) 平成 27 年 3 月 1 日 市民を対象としたグループ・インタビュー（2 グループ） 大阪
- 2) 平成 27 年 3 月 8 日 市民を対象としたグループ・インタビュー（2 グループ） 東京

4-2. 成果発信・広報活動等一覧

（1）主催イベント

- 1-1) 第 5 回 Future Earth in Asia セミナー、神戸大学サイエンスショップー理念と活動ー
開催日：平成 26 年 9 月 22 日

開催地：総合地球環境学研究所 Future Earth 推進室

参加者数：10 名

概要：神戸大学人間発達環境学研究科の伊藤真之教授より、神戸大学サイエンスショップ創設の背景、理念、これまでの活動についての説明が行われた。また、市民と科学者の対話の場としてのサイエンスカフェの開催および、市民グループと研究者の協働による地域課題解決の取り組みのコーディネート、科学技術政策形成過程への幅広い国民の参加を促す仕組みづくりについて、今後の展望と課題についての意見交換が行われた。

1-2) 第6回 Future Earth in Asia セミナー、「政策のための科学」領域におけるパブリックエンゲージメントの取組

開催日：平成 26 年 10 月 7 日

開催地：総合地球環境学研究所 Future Earth 推進室

参加者数：6 名

概要：” STI (科学技術イノベーション) に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計” (PESTI) のプロジェクト代表者でもある、志賀大学の加納圭准教授をゲストスピーカーとして招き、国民・市民の持つ意見・ニーズを政策立案過程に活かすための研究に関する講演と意見交換が行われた。

1-3) 第7回 Future Earth in Asia セミナー、“Future Earth and engaging with societal priorities: the Sustainable Development Goals as a case study”

開催日：平成 26 年 11 月 17 日

開催地：総合地球環境学研究所 Future Earth 推進室

参加者数：35 名

概要：Future Earth 科学委員会会長の、Mark Stafford Smith 教授により、地球規模の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)の達成に向けての、問題解決型の科学、知識、イノベーションを協働計画、協働生産するための手法開発についての講演が行われた。

1-4) 第3回 Future Earth in Asia ワークショップ

開催日：平成 27 年 1 月 21-22 日

開催地：総合地球環境学研究所 講演室

参加者数：53 名

概要：アジア・オセアニアを中心とした 17 ヶ国から約 50 名の研究者とステークホルダーが参加し、Future Earth の国内外の動向に関する発表と情報共有を行うと共に、昨年パリの Future Earth 暫定事務局より発表された “Strategic Research Agenda 2014 “ をもとに、アジアにおける優先的研究課題についてのグループディスカッションを行った。

1-5) (共催) RACC6 Climate Change Impact: Extreme Weather Conditions

開催日：平成 26 年 10 月 4 日

開催地：京都国際会館 (京都)

参加者数：40 名

概要：RACC6 は STS フォーラム、公益財団法人地球環境戦略研究機関(IGES)、国立環境研究所(NIES)、公益財団法人地球環境産業技術研究機構(RITE)、環太平洋大学協会(APRU)、地球研(RIHN)の共催で行われた。同会議では地域社会や機関の対応力を向上させ、世界の他の地域でも今後発生し得る悪天候を予防するインセンティブを向上させるメカニズムを検討するとともに、異常気象に備えるための知識と行動のネットワークを通じた取組みについての情

報共有と意見交換が行われた。

1-6) (共催) 京都国際環境シンポジウム—パートナーシップによる東アジアの持続可能な低炭素都市づくり—

開催日：平成 26 年 11 月 4 日

開催地：京都国際会館 (京都)

参加数：986 名

概要：京都国際環境シンポジウムでは、「産業・技術」、「市民生活・暮らし」、「教育」、「都市づくり」の 4 つの政策分野の分科会において、日本、韓国、中国、台湾、モンゴルの自治体、大学・研究機関及び環境団体関係者等が「持続可能な低炭素都市づくり」に向けて推進する先進的な取組について発表・共有するとともに、今後の展開や課題等について議論を行った。

1-7) (共催) サイエンスアゴラ・Future Earth ワークショップ「対話で考える日本の戦略」

開催日：平成 26 年 11 月 8 日

開催地：日本科学未来館 (東京)

参加者数：40 名

概要：Future Earth ワークショップ「対話で考える日本の戦略」では、今後日本として取り組むべきと思われる研究テーマ(解決すべき地球環境問題)を取り上げ、自然科学及び人文・社会科学の研究者により問題提起が行われた。また、日本の強みやリソース等に着目しながら課題解決に向けた研究および、TD 研究の実施に向けたデザインの開発について検討した。

1-8) (共催) Joint Belmont Forum SMARTS2 - Future Earth Unit Workshop

開催日：平成 26 年 12 月 1 日

開催地：総合地球環境学研究所 セミナー室

参加者数：15 名

概要：”Multinational, Inter- and Trans-Disciplinary Research Collaboration?
—India X Food, Rural, Environmental Studies as a Subject Matter—”

「国際、学際、超学際：これからの共同研究を考える—インド×食料・農村・環境研究を素材として—」と題し、超学際的共同研究をどう組織し、どう進めるかを国内外の研究者を交えてプレゼンテーション発表・議論を行った。プレゼンテーションでは、Future Earth の動向に関する情報提供を行った。

(2) 招聘等によるイベント

2-1) Scoping for SIMSEA 2015-2020

開催日：平成 26 年 11 月 19-20 日

開催地：Diliman, Phillippines

参加者数：26 名

概要：アジアを中心とした Future Earth 事業に関連してアジア太平洋地域委員会が推進する、SIMSEA (Sustainability Initiative in the Marginal seas of South and East Asia) の推進について、今後 3 年間で進めていくべき研究課題の優先度と緊急性について議論を行うと共に、今後の Future Earth との連携、アジアでの Future Earth についての情報共有を行った。

2-2) 第 3 回 Future Earth 国際科学委員会・関与委員会合同委員会

開催日：平成 26 年 12 月 1-3 日

開催地：Buenos Aires, Argentina

参加人数：29名

概要：昨年Future Earthの科学委員会と関与委員会によって作成されたFuture Earth 2025 Visionをもとに、今後、Future Earthが2025年までに、グローバルな持続可能性に向けたビジョンを達成するために必要とされる運営体制及び、今後の活動について意見交換を行った。また各委員会メンバーと各国におけるFuture Earthの最新動向について情報提供と共有を行った。

(3) 運営ウェブサイト

Future Earth in Asia (2014年3月～)

http://www.chikyu.ac.jp/future_earth/index.html

(4) 書籍、DVDなど発行物

- ・Hung Nguyen-Viet, Siobhan Doria, Dinh Xuan Tung, Hein Mallee, Bruce A Wilcox and Delia Grace 2015, 02 Ecohealth research in Southeast Asia: past, present and the way forward. *Infectious Diseases of Poverty* 4(5). DOI:10.1186/2049-9957-4-5.
- ・Asakura, Takeshi, Hein Mallee, Sachi Tomokawa, Kazuhiko Moji and Jun Kobayashi 2015, 02 The ecosystem approach to health is a promising strategy in international development: lessons from Japan and Laos. *Globalization and Health* 11(3). DOI:10.1186/s12992-015-0093-0.
- ・安成 哲三 2014年10月 3.1 近代科学の限界 — 環境問題はなぜ解決しないか. 渡邊 誠一郎・中塚 武・王 智弘 編 臨床環境学. 名古屋大学出版会, pp. 63-74.
- ・安成 哲三、佐藤 永 2014年10月 2.3 20世紀中盤以降のグローバルな環境問題. 渡邊 誠一郎・中塚 武・王 智弘編 臨床環境学. 名古屋大学出版会. , pp. 39-53.
- ・佐藤 永、安成 哲三 2014年10月 2.2 産業革命以降のローカルな環境問題. 渡邊 誠一郎・中塚 武・王 智弘編 臨床環境学. 名古屋大学出版会, pp. 32-38.
- ・安成哲三 2014年10月 特集2 アジアの経済発展と地球環境の将来：人文・社会科学からのメッセージ「フーチャーアース：その目的、緊要性とアジアの重要性」. 日本学術協力財団、日本学術会議. 学術の動向 19(10) :84-85.

(5) メディア掲載等

- ・特になし

(6) その他

- ・特になし

(7) 学術研究発表

①論文発表 (国内誌 0件、国際誌 0件)

② 招待講演 (国内会議 8件、国際会議 1件)

- ・谷口 真人 (総合地球環境学研究所)：“Groundwater studies in Asia for global sustainability” International Association of Hydrogeology 2015 Asia-Pacific Regional Meeting, Lotte City Hotels Jeju, Jeju (韓国)、2015年4月9日
- ・安成 哲三 (総合地球環境学研究所)：“Importance of Asian monsoon region in Future Earth. Asian monsoon Hydroclimate -Review of MAHASRI and Beyond- “、名古屋大学 (愛知) 、2015

年3月4-5日

- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：“Future Earth and its implication in Asia and Pacific. Tokyo Conference on International Study for Disaster Risk Reduction and Resilience (ISDRRR)”、Ito Hall（東京）、2015年1月14-16日
- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：“Future Earth and Its Implication in Asia and Pacific, Chubu University 5th Digital Earth Summit”、中部大学（愛知）、2014年11月9日
- ・ 安成哲三（総合地球環境学研究所）：「Future Earth —持続（未来）可能な地球社会をめざして—」Future Earth ワークショップ「対話で考える日本の戦略」、日本科学未来館（東京）、2014年11月8日
- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：「Future Earth その東アジアでの意義」イクレイ京都国際環境シンポジウム、京都国際会館（京都）、2014年11月5日
- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：“Future Earth and its implication in Asia” RACC6、京都国際会館（京都）、2014年10月4日
- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：「—持続（未来）可能な地球社会をめざして—」JaLTER All Scientist Meeting 2014、京都大学芦生研究林（京都）、2014年9月29日
- ・ 安成 哲三（総合地球環境学研究所）：「—持続（未来）可能な地球社会をめざして—」Future Earth/Trans-disciplinary 研究勉強会、国立環境研究所（茨城）、2014年9月26日

③口頭発表（国内会議3件、国際会議3件）

- ・ 谷口 真人（総合地球環境学研究所）：「水にまつわる地球環境問題 その1：世界の水問題を衛星から見る・現場から見る」日立環境財団サイエンスカフェ、東京、2014年10月22日
- ・ 谷口 真人（総合地球環境学研究所）：「水にまつわる地球環境問題 その2：水とつながるエネルギーと食料」日立環境財団サイエンスカフェ、東京、2014年10月22日
- ・ 谷口 真人（総合地球環境学研究所）：「Future Earth からみた水に関する大型研究プロジェクト」日本水文科学学会学術大会、2014年10月5日、広島大学（広島）
- ・ Hein Mallee（総合地球環境学研究所）：「エコヘルスとは何か？」地球研セミナー、北京大学（中国）、2015年3月17日
- ・ Hein Mallee（総合地球環境学研究所）：“Thinking about Future Earth in Asia”、RIHN Workshop on Transdisciplinary Research on Asia、Iloilo City（フィリピン）、2014年10月24日
- ・ 大西 有子（総合地球環境学研究所）：“Supporting Regional Assessments in the Context of Intergovernmental Platform on Biodiversity and Ecosystem Services”、北京（中国）、2014年11月9-12日

④ポスター発表（国内会議0件、国際会議0件）

(8) 受賞等

- ・ 特になし

(9) 特許出願

①国内出願 (0件)

(10) その他特記事項

・特になし